

実践例で学ぶ 第二言語習得研究に基づく英語指導

鈴木 渉 編

A5判・218頁
本体1,800円＋税

[評者]
小林英治



コミュニケーションと文法指導の英語の「融和」

政、官、財の要請を受けての英語教育政策の変化に現場の教師は翻弄され、日々教室で苦悶し奮闘している。このような背景の中でできたコミュニケーション能力の育成を掲げる英語教育の潮流は、伝統的に行われてきていた文法訳読式指導法を退けた。文法指導や授業で母語を使用する場面では教師は幾分、罪悪感を持ちながら指導にあたるようになった。

文法指導については明示的な指導と暗示的な指導のせめぎ合いが続く。文部科学省は「外国語習得の過程は、曖昧さに耐えながら、コミュニケーションの経験を通して曖昧さを徐々に減じていく過程だ」とコメントする。一方で本書は、「コミュニケーション活動の中で、言語形式に注意を向けさせる指導を行うことが、単純に意味だけを重視する活動よりも、学習効果が高い」(p.8)と述べる。

本書は教室内第二言語習得研究(ISLA)の視点から、現場の教師が時には経験則で判断し実践する英語の授業を理論的に後押しする。

新学習指導要領では中学校でも「英語の授業は英語で」と明記されるが、本書では中学校の授業で

は母語の効果的な利用について言及する。教師にとっては悩ましい、パフォーマンステストについても実施法や評価について詳しく記載されている。授業の導入で行う小テストにも絶妙の見取りとタイミングを助言している。

現場の教師に、これまでの指導はそれほど間違っていないかった、理論を踏まえたうえで微調整すればよい、第一言語(日本語)も時には効果的に使用すればよい、といった温かいトーンで語られているようである。

本書は以下の13章から成る。1章は文法指導の変遷、2・3章はインプット強化と処理指導、4・5章はフィードバック、6章は効果的なタスクの活用、7章はペアやグループ活動での指導法、8・9・10章は発音指導、語彙指導、語用論指導、11章は学習者の見取りとコンテクスト、12章では評価について、13章はまとめとしてフォーカス・オン・フォームについて触れている。各章ごとに理論の解説の後に中学校、高等学校それぞれの授業における理論に合った授業実践例が記載されている。

編者が中心となって招聘された国内外の著名なESL研究者による講演会では、常に校種を問わず数多くの教師が参集して現場で英語の授業をする際のつまずきや悩みが共有されてきた。本書はこれらの声に耳を傾け、変化多き英語教育の現場で時として戸惑い、指導法を模索する教師に寄り添いながら語られている。私には教室で思い悩む英語教師への温かい言葉が随所で響きわたっているような気がする。

(こばやし えいじ・山形県立東桜学園中学校・高等学校教諭)

タスク・ベースの英語指導

TBLTの理解と実践

松村昌紀 編

A5判・272頁
本体2,500円＋税

[評者]
柳瀬陽介



広汎な情報を凝縮した知恵があなたの授業観を変える

「タスクベースの英語指導」(TBLT: Task-based Language Teaching)と言われても、特に興味を抱かない方も少なくないかもしれない。なにせ、小中高のほとんどの授業は、言語的目標の提示と定着という構造をとっているからだ。いわゆるPPP(Presentation-Practice-Production)である。大学のシラバスを見ても、TBLTはほとんど見当たらない。「TBLTは海外のもの。日本ではPPP」というのが日本の英語教育界の「常識」なのかもしれない。

しかしもし日本が世界の中でおそらく「英語教育にもっとも熱心な国」であると同時に「学習者をもっとも英語下手な国」であるとしたらその「常識」を疑うことも必要だろう。ぜひ本書を手にとってほしい。

理論編の第1部と実践編の第2部から構成された本書は、TBLTについて系統だった理解が得られるように編まれている。だが、もしあなたがTBLTについて否定的な見解をもっていたり、ほぼ何の知識もなかったとしたら、第2部(実践編)の最初の第5章から読み始めるといいかも

しれない。特に表5.1の「タスクのタイプと例」に注目したい。授業に創意工夫を凝らしている教師なら「これはやっている」、「これならできる」と思える活動が次々に頭に浮かぶだろう。そして続く第6～8章で小中高大の実践についてより具体的に学ぶ。それから第1部（理論編）の第4章を読みTBLTについての懸念や疑問を解消すれば、TBLTは自分とは縁遠いものとはとても思えなくなるだろう。

しかし本書の真価はここからだ。TBLT実践についてのイメージをもった上で、本書冒頭章の第1章と最終章の第9章をぜひじっくり読んでほしい。日本の英語授業は「教室の中のゴール」を目指すことだけに終始していないか、英語教師の指導と評価は「自己完結の檻」に閉じ込められていないか、ことばの習得とは本来「楽しみながら自然にできるようになっていくこと」ではないか——これまで一顧だにできなかった考えにあなたは新しく深い意味を見出すだろう。その上で第2～3章でTBLTの応用言語学的・教育学的考察（文献情報がすばらしい）を読む。その頃には、この本はあなたの英語授業を根底的に変えてくれる記念的な書となっているかもしれない。

常識を疑い、より真実に近づくことは容易なことではない。それには、広汎な情報を凝縮した知恵が必要だ。編著者の前著である『タスクを中心とした英語授業のデザイン』と共に、本書を授業に関する具体的で深い思考に導いてくれる良書として多くの実践者・研究者に心からお薦めしたい。

（やなせ ようすけ・広島大学教授）

実例でわかる 英語テスト作成ガイド

小泉利恵・印南 洋・
深澤 真 編

B5判・176頁
本体1,800円＋税

〔評者〕

江草千春



これからのテスト作成・評価・検証・改善に大切な実践ガイド

教育現場では、アクティブラーニング、カリキュラムマネジメント、高大接続改革などのキーワードをよく耳にする。また、英語科においては、小学校における英語の教科化、センター試験に変わる大学入学共通テストにおけるリーディング・ライティング・スピーキング・リスニングの4技能をどのように適切に評価するか、ということが話題に上がっている。

そのような趨勢の中で、本書は、変わる授業、変わる入試に対応するテスト作成について、テスト実例の添削を通して改善方法を具体例で示しつつ、テスト作りで知っておきたい理論をわかりやすく解説している。

本書は、以下の3章から構成される。第1章は〔テスト添削編〕。テストをどう改善するかを学ぼう、第2章は〔理論編〕。テスト作成に必要な理論を学ぼう、第3章は〔演習編〕。テストを一から作ろう、である。

第1章では、中高で実際に使用されたテストについて4技能別に添削前と添削後の2パターンを示し、どのように改善すればより適切な能力を測定するテストになるか、あるいは、より適切な指示文

になるかについてポイントを解説している。

第2章では、テスト作成の原則、実施時の注意点、テスト形式、テスト実施後の注意点についてわかりやすく解説している。とりわけ、観点別評価・CAN-DOリストとの関係、技能統合型テスト、PDCAサイクルによるテスト結果の生かし方については、よりよい学校評価・経営を進めていく上で今後、ますます重要な項目であり、一読に値する。

第3章では、4技能別、そして、技能統合型テストについて作成例が紹介されている。ここでは、予想される対話例・解答例だけではなく、採点基準であるルーブリックが記載されていて、なおかつ採点例についても得点ごとに詳細が記述されている。そのため、教師が採点に困ったときのヒントとなり、生徒になぜそのような採点となったかについての説明責任を果たすことができる。

いずれにしても、少しずつ改善はされてきている部分がありながらも、いまだに定期テストでは、能力を包括的に測定しようとする総合問題が散見される。本書は、これからの変革に備えて現場の教師がどのように対処していけばよいかの指針を示した示唆に富む1冊である。日々のテスト作りの参考書としてだけでなく、校内研修にも大いに活用ができる。また、大学の教職課程における講義の教科書の1つとしても十分活用できる素晴らしいガイドであることは言うまでもない。

（えぐさ ちはる・北海道湧別高等学校教諭）